

作物管理情報

(平成 24 年 1 月 12 日)

今のところ本年は積雪が少なく昨年のことを思うと随分楽に過ごせていますが寒の入りも真近となって、冷え込みも一段と厳しくなってきました。気温も平年より低く推移していることと、日照が不足していますので、軟弱野菜の伸びが大変悪くなっております。このことは気象のことなので如何ともし難い状況です。

ハウレンソウベト病対策

抵抗性品種を利用する。(トラッド7、クロノスなど)

窒素分をやり過ぎない。(畜糞堆肥の多用は窒素過剰となる)

密植を行なわない。(株内の蒸れが発病促進)

ハウス内の湿度をできるだけ低下させる。(灌水厳禁、ハウスサイドの排雪)

早めの薬剤散布(予防はボルドー剤、初発からランマンフロアブル)

現地では、ハウレンソウのベト病が発生しているハウスがいくつか見られています。これまでも注意を喚起してきたところですが、管理上の問題も見受けられます。

まず、生育を促進しようと灌水をされている方がおりますが、畦面が湿っている圃場においては全く必要ないことですし、逆にベト病など病害の発生を促進します。

たまたまの晴天日に出来るだけ温度を上げようと、しっかり締め切ったままにされている状況もみられます。ハウス内が乾いている場合はまだしもですが、湿気がこもっているハウスでは換気を行い、湿度の低下に努めてください。

ベト病は湿気が高く、空気が停滞していると発生してきます。対策は抵抗性品種を利用することが大切ですが、抵抗性のない品種を既に播種されている場合は、先ず第一にハウスの湿度を出来るだけ低下させるような管理を行なうことです。特に冬場はハウスサイドにたまった雪が徐々に溶けて、ハウス内への浸入水の原因となりますので、雪を排除するなどの対策を取りましょう。

薬剤防除: 予防的には使用制限のないボルドー剤(コサイドボルドー、ドイツボルドー-A、Zボルドー)を散布しておきます。発生が確認されたらランマンフロアブル(3日前まで)がもっとも期待できるでしょう。他に期待できるのはアリエッティ水和剤(前日まで)くらいです。

発生がハウス全体に広がってしまった場合は、出荷はあきらめ、搬出処分を行ないます。(作業的に困難な場合問題がありますが、すき込みも致し方ないでしょう。) 後作は品目を変えることがベターですが、ハウレンソウを播きなおす場合は抵抗性品種を使用すると共に、必ずリドミル粒剤2を反当たり9kg施用しましょう。

なお、**実害が少ないため気にされていないケースが殆どですがコカブにもベト病が発生しています。**むしろハウレンソウより発生は多いと思います。発生がひどくなると、ベト病菌がカブ(根の中)に入り、外観では分かりませんが、根の中に小さな黒点を発生させ商品価値を低下させます。防除はランマンフロアブル(3日前まで)が登録されています。(ベト病はコマツナ、シュンギクにも発生します。いずれも多湿が引き金となっています。)



ハウレンソウのベト病



カブのベト病

特記事項